

聖書：Ⅱペテロ 2：6～16

説教題：ベオルの子バラムの道

日時：2018年3月11日（朝教）

偽教師たちについて書かれているペテロの手紙第二の2章。ここを3回に分けて見て行きますが、今日はその2回目となります。先ほど読んで皆さんもそうお感じになったと思いますが、とても読みにくいところです。この手紙の1章と3章には有名なみことばが色々出て来ますが、この2章を好む人はほとんどいないのではないかと思います。私もこの手紙を説教で取り上げようかと検討した際、まず考えたことは、この手紙にはこの2章があるからな～ということでした。しかしこの章は自分の死が近いことを知っていたペテロが書き残そうとして書いた中心的部分です。すなわち偽教師たちに関する警告です。これは決してこの手紙が書かれた1世紀だけの問題ではありません。ペテロは2章1節で、神の民の旧約の歴史にもにせ預言者が出たと述べていますように、いつの時代にも形を変えて起こって来る問題です。ですから私たちもこの彼のメッセージに良く耳を傾けることが大事だと思います。

この時の偽教師たちはキリストの再臨の日が来ること、最後のさばきの日が来ることを否定していました。そのことが不道德な歩みと直結していたようです。そんな彼らに対して、ペテロはさばきがないことはない、さばきは昔から怠りなく行われていると述べます。その実例として前回は罪を犯した御使いたちに対するさばきと、ノアの洪水のさばきについて語りました。今日はその実例の三つ目となります。それはソドムとゴモラへのさばきです。6節に「また、ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、以後の不敬虔な者へのみせしめとされました」とあります。この出来事は創世記19章に記されています。創世記の方には「主は、ソドムとゴモラの上に、硫黄の火を天の主のところから降らせ、これらの町々と低地全体と、その町々の住民と、その地の植物をみな滅ぼされた」と記されています。その結果、翌朝早くアブラハムが行って見ると、その地からは「かまどの煙のように煙が立ち上っていた」と記されています。もともとこの地域は「主の園のように、どこも良く潤っていた」と言われていた、美しく素敵な町でした。しかしその地の住民の悪のゆえに「灰」にされるというさばきを刈り取ったのです。ここに神は、その町が仮にどんなに美しくても悪があるならさばかれるという実例があります。そしてこれは単にこの時にそういうことが起こったというだけのことではなく、やがて究極的なさばきが起こるということの前触れ、その予告としての意味を持つ出来

事だったのです。

しかしここにはノアの洪水と同じく慰めのメッセージもあります。それは全部が滅ぼされたのではなく、その中から救われた者たちもいたということです。ソドムとゴモラの場合はロトです。その彼のことがここで「義人ロト」と言われています。私たちは創世記の記事を思い起こして、そうだったかな～と思うかもしれません。ロトは色々な弱さを持っていました。すぐにこの町を出て行くようにと御使いに促されたのにぐずぐずしていたり、あるいは同性愛の対象にしようと町の人々が迫って来た時に娘を差し出すから勘弁して！などと発言したり、……。しかしこのロトについて、7節に「無節操な者たちの好色なふるまいによって悩まされていた」と書かれています。「悩まされていた」というのは、周りに同調しなかったということです。周りに同化しなかったということです。これは彼の正しさを示しています。8節の「というのは、この義人は、彼らの間に住んでいましたが、不法な行いを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたからです」ということも同じです。彼は彼らのただ中に住みながら、日々悩み、心痛める正しさに生きていたのです。そういう彼はそのさばきから救い出されました。9節前半に「これらのことでわかるように、主は、敬虔な者たちを誘惑から救い出すことを、……心得ておられる」とあります。たとえ周りすべてが悪に囲まれている中にあるとしても大丈夫。敬虔に歩む者を主は救い出してください。だからあなたがたもどんな中にあっても正しい歩みを！悪に負けずになお敬虔に歩む戦いを！とペテロは勧めているのでしょ。その一方、不義な者どもについては、主は彼らを懲罰のもとに置き、やがてそれらが指し示す最終的なさばきを下されるのです。

さてペテロは10節後半からも、さらに偽教師たちについてのことばを語ります。まず彼が言っていることは彼らは傲慢であるということです。10節後半：「彼らは、大胆不敵な、尊大な者たちで、栄誉ある人たちをそしって、恐れるところがありません。」この「栄誉ある人たち」とは誰のことでしょうか。これは難しい問題です。そこには米印がついていて、欄外の10に、あるいは「御使いたち」とあります。おそらくこの「栄誉ある人たち」とは「御使いたち」を指すのだろうということで学者たちはほぼ一致しているようです。しかしこの「御使いたち」は良い意味の御使いたちなのか、それとも墮落した御使いたちのことなのかについては意見が分かれています。これに対して11節には「それに比べると、御使いたちは、勢いにも力にもまさっているにもかかわらず、主の御前に彼らをそしって訴えることはしません」とあります。前回に見た4節も

そうでしたが、果たしてこれは歴史の中のある出来事を指しているのか、だとすればそれはどういうことだったのかと私たちは知りたくなります。ユダの手紙の9節には、この表現と似たことばが出て来ますので、あとで参照して見てください。ペテロははっきりそのようには語っていませんので、それと同じかどうか、私たちに断定することは難しい問題です。しかしポイントははっきりしています。御使いは天的存在として偽教師たち人間より勝っている者たちであるのに、主の御前では自分自身をわきまえて、相手をそしることはしない。先走ったさばきはしない。そういう慎み、へりくだりの姿勢を持っています。なのに一方の偽教師たちは自分たちの方が劣っている存在であるにもかかわらず、榮譽ある人たち、より高い次元の存在に対して高ぶり、そしっている。このような傲慢さが彼らの特徴であるということです。

その彼らは次の12節を見ると、自分を誇りつつも、理性のない動物のように振る舞っていると言われています。人間より上の存在を平気でそしり、自分たちは特別な知恵と洞察力を持っていると主張しつつも、その生活は人間以下。まるで動物そのもの。偉そうなことを言いつつ、実生活は本能に従う獣同然。ただの快樂主義者。そういう彼らは、動物がやがて捕らえられ、殺されるのと同じように、自ら罠に陥り、滅ぼされる運命をたどるとペテロは言います。その彼らの生活ぶりが以下に記述されます。

動物と同じように、ただ本能に従う彼らの本性はどんな生活に現れているのでしょうか。それは思うがままに食べたり、飲んだり、性をもてあそぶといった姿に現れます。まず言われているのは、13節にある通り、昼のうちから飲み騒ぐということです。これを読んで私たちは、夜だったら飲み騒いでも良いのかと考えるかもしれません。飲み騒ぐという表現がどうかはともかく、一日の働きを終えて夜に適切に食べ、また適切に飲むという楽しみの時を持つことまではここで否定されていません。しかし偽教師たちは昼のうちから飲み騒ぐ。まさに快樂主義丸出しです。人間以下の理性のない動物に似た姿です。その彼らは「しみや傷のようなもの」と言われています。後に3章14節で「しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られるように」とありますように、この「しみ」や「傷」は神に受け入れられないものであることの象徴的表現です。さらに偽教師たちについて「あなたがたといっしょに宴席に連なるときに自分たちのだましごとを楽しんでいるのです」とあります。「あなたがたといっしょの宴席」とありますから、これはクリスチャンたちのテーブルの交わり、特に当時の聖餐式と合わせて行われた食事会、いわゆる愛餐の時を指していると考えられます。彼らはその親しいクリスチャンの交わ

りの場を飲み騒ぐ場としていた。主への恐れなどどこにもなく、ただ食べたり、飲んだり、自分たちの欲望を満たす場としていたのです。

さらに 14 節には性的な不道德のことが語られています。「その目は淫行に満ちており」とは、情欲を抱いて異性を見ることでしょう。すでに 2 節に「多くの者が彼らの好色にならい」と言われていました。そして罪に関しては飽くことを知らず、心の定まらない者たちを誘惑する。次回見る 18 節にも「ようやくそれを逃れようとしている人々を肉欲と好色によって誘惑し」とあります。このような彼らの心は「欲に目がありません」とあります。新改訳 2017 はここを「心はどん欲で鍛えられている」と原文のニュアンスを出して訳しています。彼らの心はどん欲によってトレーニングされている。良い事柄によって自分の心を鍛えるのではなく、どん欲によって自分の心を鍛え上げ、言わば悪い筋肉をつけている。まさに理性のない動物です。彼らは呪いの子です！とペテロは言います。

そしてペテロはもう一つ、彼らについて 15 節で「彼らは正しい道を捨ててさまよっています。不義の報酬を愛したベオルの子バラムの道に従ったのです」と言います。ベオルの子バラムは民数記 22～24 章に出てくる人物です。イスラエルが約束の地に上って来る際、モアブの王バラクはイスラエルを恐れて、ユーフラテス河畔のベトエルにいた預言者バラムを雇って、イスラエルへの呪いの言葉を語ってもらおうとしました。しかし神が彼に現れて、イスラエルを呪ってはならないと告げます。そこでバラムはモアブの王バラクのところから来た使者を一旦返しますが、モアブの王はあきらめず、再度使者を遣わします。そして「あなたを手厚くもてなします。あなたが言いつけることはみなします。ですからどうか拒まないでください」と言わせます。これを聞いたバラムは、イスラエルを呪ってはならないという主の御心を知りつつも、使者たちをすぐに返さず、「今晚はここに泊まりなさい」と引き止めておきます。そして「主が何かほかのことをお告げになるかどうか確かめましょう」と言います。明らかに報酬を手にしたと思ったからです。彼はこの時は結果的に神に戒められ、イスラエルを呪うことはしませんでした。そのすぐ次の章、民数記 25 章でイスラエルがモアブの娘たちと不品行を行った際にある役割を果たしたようです。民数記 31 章にも記されていますが、ヨハネの黙示録 2 章 14 節にこのように書かれています。「バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげたものを食べさせ、また不品行を行わせた。」 こうしてバラムは結局、モアブの王からの報酬を手にしたの

でしょう。そしてこのために彼は滅びます。民数記 31 章 8 節に彼の死が記されます。つまりバラムは結局、正しい道を捨て、不義の報酬を愛して、欲望の道を進み、滅びたのです。偽教師たちもこの道を進んでおり、その末路はこのようなものであるとペテロは言っているのでしょう。

16 節にはバラムに関する有名なエピソードが加えられています。ものを言うことのないロバが、人間の声でものを言い、この預言者の狂った振舞いをはばんだ、とあります。詳しくは民数記 22 章 21～35 節に記されています。ろばに見えていたことがバラムには見えておらず、ろばに教えてもらわなければならなかった。先に 12 節で偽教師たちは理性のない動物と同じと言われましたが、いや動物以下である！との皮肉がここにあるのだと思います。自らを賢い者とし、高ぶって他の人をそしりつつも、実際は欲望に突き動かされて動物レベルの生き方をしている、いやもっと低いレベルの存在になり果てていると。あともう 1 回、次回の時に、この厳しい 2 章残りの部分を見て行きたいと思います。

私たちはここから何を学ぶべきでしょうか。それは偽教師たちの道は滅びの道、さばきを身に招く道であるということでしょう。彼らは自分たちを知恵ある者と宣伝し、自分たちを持ち上げながら、実生活では墮落した本能に従い、昼間から飲み騒ぎ、また情欲によって不品行を行い、またこの世的な報酬を得ることに目がなくて、バラムの道を行っていました。このような彼らの教えにだまされることがないように！あなたがた自身もその道を行くことがないように！ということでしょう。私たちは果たして自分を振り返って、今日のこのような偽教師たちの教えにだまされていることはないでしょうか。表面的には聖書を使っても、神のさばきを強調しない。神はまるでさばかない方であるかのように語って、偽りの安心感を与える。だから少々の罪は犯しても問題ないとして、もっと楽しくこの世の人生を生きよう！細かいことは言わず、もっと自分のしたいことをして、もっと自分を満足させる歩みをしよう！と駆り立てる。そうしていつの間にか正しい道を捨ててさまよい始め、ベオルの子バラムと同じ道を進んでいるということはないでしょうか。そんな私たちにペテロは、正しい教えを思い起こさせてくれています。それは新しい教えではなく、今まで聞いて来たものです。それは第一にキリストの再臨の日は必ず来るということ、最後のさばきの日は確実に来るということ。第二にその日を見上げて、耐え忍んで敬虔に生きる者こそを神は救い出してくださるということ、不徳を行う者はやがて必ずさばかれるということ。そして第三にその敬虔に歩むための

すべての力は主イエスの神としての御力が与えてくださるということ、主を信じる信仰者はその主の御力によっていよいよ敬虔に歩むという「実」を日々の生活の中で結ぶ者でなくてはならないということ。私たちは偽りの教えにだまされず、福音が語る通り、神のご性質にあずかる者となるという神が定めてくださったゴールを目ざして、1章5～7節で言われた通り、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、・・・と増し加える歩みへ進みたいと思います。そして先ほど参照した3章14節にある通り、やがての日にしみも傷もない者として、平安をもって御前に出ることができるように、日々祈り励み、救いの道を前進して行く者でありたいと思います。